
魔道士と整理係

豆吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔道士と整理係

【Nコード】

N1043BA

【作者名】

豆吉

【あらすじ】

上司からのセクハラに嫌気がさして勤めていた会社を辞めた桜木七生（31歳）。

ハローワークの前でアレン・クロスビーさんという外国人男性に声をかけられ、彼のアシスタントとして働くことに。その1年後、アレンさんから給料3割増で、彼の甥・デルレイの家の書庫&倉庫の整理係として働いてほしいと頼まれる。びっくりなのは、アレンさんとデルレイは実は異世界の人間で、デルレイの家は異世界のブレドン王国にあるってこと！

「この年齢でファンタジー経験をするなんて。人生って驚きの連続だよ。」と言う彼女の異世界での日常と恋愛話。

プロローグ：それは1年前でした

私は桜木 七生。 31歳で独身、一人暮らし。恋愛は何度かしたけど今は彼氏なし。・・・結婚も予定なし。製薬会社で管理部門の事務職として早11年。給料も待遇も悪くない。人間関係も円滑・・・だったんだけど。上司の度重なるセクハラおよびセクハラ発言に嫌気がさして会社を辞めました。

ま、辞めるときに上司のセクハラの証拠をばっちり労働局と人事につきつけて上司が免職処分を受けたと同期から聞いてすっきりできたからいいけどさ。

仕事を辞めたので、実家に帰るというのも、一瞬考えたけど・・・よくよく考えたら今うちの実家は同居している弟夫婦に子供が生まれて孫フィーバー真っ最中。おかげで母親の「まだ結婚しないの」攻撃をまぬがれているというのに無職になった姉が転がり込むのって非常によろしくない。

私は実家に帰るといふ考えを捨てて、ハローワークに向かうことにした。派遣会社に登録しておくのもいいかもしれない。ネットの求人サイトにも登録だな。

ハローワークの中に入ろうとしたところ「ちよつと、すみません」と後ろから声をかけられた。振り向くと、シルバーグレイの髪の毛に緑色の瞳で彫りが深くどうみても外国人の男性だった。

周りをきよきよしてみるけど、私以外に人がいない。私は自分を指差して「私？」と示すと、その男性は何度もうなずいていた。「あなた、職を探していますね？」男の人はいきなりなめらかな日本語で私に言った。

「はあ……まあ、探してますけど」なんじゃ、この外人は。

「じゃあ、私のアシスタントとして働いてみませんか？」

「はあ？」

「失礼しました。私、アレン・クロスビーと言って、職業は・・・まあ、貿易業です。『クロスビー商会』という会社を経営してます。」

「はあ。」どうして、貿易業というまえに一瞬考えたんだろう。

「あなたのお名前を覚えていただけますか？」

「あ、失礼しました。私は桜木七生です。」思わず正直に名乗ってしまった。

「サクラギさん。ここで立ち話もなんですから、もし時間があつたら私のオフィスで話の続きをしませんか？待遇なども、詳しく話せます。この近くですから。」

“クロスビー商会”のオフィスというのは、クロスビーさんの住宅だった。たくさん樹木が生い茂る大きな洋館で、クロスビーの表札のしたにクロスビー商会という表札もついている。

「奥さんを亡くしまして、家政婦さんを頼んでいます。乱雑ですみません」と言うが、とても整然としている。

クロスビーさんが入れてくれた紅茶を飲みながら（これがまた美味い）、私はクロスビーさんの話を聞いた。

「仕事内容というのは、私の仕事のアシスタントです。メールや電話のやりとりと、品物の管理です。それから、ちよつと言語を覚えてもらいます。OK？」

「言語、ですか？」

「はい。ブリードン語と言って、うちの貿易に必要な言語です。他では役にたちませんが、私の仕事には大変役立ちます。待遇なのですが、会社で各種保険と年金には加入します。勤務時間は朝9時からと決まっていますが、仕事によって終わる時間はまちまちです。お休みは週休2日ですが、事前に言っただければ何曜日に休んでいただいてもいいです。病気とかの場合は私に電話してくれればいいです。」

言語を覚えなくちゃいけないのは大変だし、勤務時間が不定期だ

けど待遇は悪くない。

「あと・・・言語を覚えた後、ちよつとした出張に行ってもらってもいいです。大丈夫ですか？」

「どこにですか？」

「えーつと、カイガイ？ですネ」

おお、海外出張か。事務職の頃には縁がなかった。なんか楽しそう。
「あ。そうそう給料なんですけど各種手当を差し引いて・・・こんな感じです」と言つてクロスビーさんが提示した金額は、なんと前の会社の給料より2割増し！！私は思わず目を見張った。

「給料は“クロスビー商会”名義で振込みになります。なにか質問はありますか？」

「他の社員の方というのはいらっしゃいますか？」

「いいえ。私一人ですね。お金関係は全部お願いしてますから。書類を提出するだけなので楽です。」クロスビーさんは、その人のことを全面的に信頼してるらしい。

クロスビーさん本人も最初は胡散臭かったけど、話を聞いてるとマトモな人そうだし、何より新しい言語を覚えられたり（他では使えないらしいけど）、海外出張があるかもっていうのもいい・・・そして何より、あの手取りの金額。判で押したような前の仕事内容とは違いなんだか楽しそうだ。

私は、クロスビーさんの申し出を受けることにした。

クロスビーさんはうれしそうに「ありがとうありがとう」と何度もお礼を私に言った。

そんな、お礼を言われるようなこと、私しただろうか？

とりあえず、あっさり次の就職先が見つかったのはよかったかもしれない。

ブログ：それは1年前でした（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

新作をUPしました。

現代物はお休みして、ファンタジー（と言えるのか）を書くことにしました。

アラサー七生の異世界生活を楽しんでいただけると幸いです。

1・失礼なオトコ（前書き）

ブログから1年後になります。

『内の会話はブリードン語

』内の会話は日本語です。

1・失礼なオトコ

クロスビー商会に入社して、1年が過ぎた。クロスビーさんと仕事をするのは、とても楽しい。

電話やメールは時々しか来ないのでそっちの仕事はあんまりなくて、メインはクロスビーさんの家にある珍しい品物の管理だ。ブリーダー語も、クロスビーさんから抜き打ちテストをされたりして日常会話と読み書きに困らなくなった。

仕事の特にないときもあって、そういうときはクロスビーさんが庭にテーブルを出してお茶をするので、ご相伴に預かる。クロスビーさんの庭は亡き奥様が丹精こめて手入れをしていたらしいけど最近では忙しくて手入れができないらしい。

私も暇なときには草むしりをしたり手入れをすることにしてるけど、この庭がよみがえったら、さぞかしきれいだろうな。

「桜木さん、私のことはアレンと呼んでくださいね。私もナナオと呼びますから」

「上司を名前で呼ぶんですか？できませんよ。」

「貿易相手にクロスビーという名字が多いんですよ。区別できないでしょう？」

「なるほど。わかりました。」

そういう理由があるなら、と私はクロスビーさんをアレンさんと呼ぶことにした。

それから数日後、私はいつもの時間にクロスビー商会用に使っている部屋のドアを開けた。

「おはようございます。アレンさん。」と言ってドアを開けたところ、アレンさんの他に若い男性が立っている。

アレンさんの20年前ってこうだったんだろな・・・息子か？髪の色は同じだけど、瞳の色はコバルトブルー！。

私がその人をじつと見ているように、その人も私をじつと見ている。

「アレンさん、・・・こちらは、どなたですか？」

「おはよう、ナナオ。これは私の甥で、デルレイ・クロスビーとい
います。」

「叔父上、俺にも分かる言葉で話してもらえないだろうか・・・美人だっ
て言うから期待してたのに」

「デルレイ、お前失礼だぞ。ナナオは仕事もできるし美人だ。」

「そうですか？仕事はできるかも知れませんが、叔父上と私とは
美意識が違うようだ」

デルレイさんは私が分からないと思ってしゃべっているようだけ
ど、こっちはばっちり分かるんだ。悪かったな、美人じゃなくて。
アレンさん、こんな普通の顔を美人と言ってくれてありがとう。

「すみませんね。美人じゃなくて。アレンさんがフォローしてくれ
てなかったら、あなたのすねには今頃、私の5センチヒールキック
が炸裂しているところですよ」

私がつこり笑って二人の会話に割り込むと、デルレイさんは「
な？？おまえ、言葉が分かるのか？？」と驚いた。

「オマエじゃなくて、ナナオ・サクラギという名前がありますの。
言葉はアレンさんに教わりましたから日常会話に不自由しない程度
にしゃべれるようになりましたし、読み書きもできます。わからな
い言葉でしゃべられるのがイヤなら、あなたもこちらの言葉を覚え
たらいいわ」

「う・・・生意気なやつ。どうみても俺より年下のくせに」

「あなた、年齢はいくつですか」

「32だ」

「あら、同じ年齢ですわね。」とニツコリ笑うと、失礼なオトコ・
デルレイは「げ」と言っただけで絶句してしまった。

その頃、私たちの会話を聞いていたアレンさんが、とんでもない

ことを考えていたなんて、そのときは全然気がついていなかった。

1・失礼なオトコ（後書き）

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

いきなり失礼なオトコですが・・・これがヒーローなんです。

2・上司からの引越し命令（前書き）

七生、洋館ライフにぐらつく。の巻

2・上司からの引越し命令

今日は特に急ぎの仕事がないらしく、アレンさんが紅茶を入れてくれてお茶の時間になった。

「ナナオ、デルレイが失礼なヤツですみませんね」

「いいえ。アレンさんの身内じゃなかったら今頃ヒールで蹴っ飛ばしてますけど、我慢します。」

「なんなら蹴っ飛ばしてもOKですよ」

「あら。いいんですか？」私は、デルレイを見てニヤリとした。

デルレイは言葉が分からなくても何かを察知したらしく「おい、ナナオ。やめろよ」と若干身構えている。

「ナナオって気安く呼ばないでよ。クロスビー」

「叔父上には名前で呼ばせてるじゃないか。俺にも呼ばせろ」

「いやよ。なんで人のことをけなす人間に名前よばれなきゃならないのよ。私のことはサクラギと呼んでよね」

それにしても、コイツの性格……。アレンさんの甥でしかもハンスムな顔してるのに残念なオトコだな。

デルレイは、私の思考を読んだらしく「俺に対して、かなり失礼なこと思ってるだろ？」と私をにらみつける。

「ぎく。私は『そんなこと、思っていない』とごまかしたけど、なぜわかったんだらう。」

「ナナオ。今日はあなたにお願いがあるのです」

今まで私たちのやりとりを黙って聞いていたアレンさんが口を開いた。

「あなたに出張に行ってもらいたいところがあるのですが……。かなり長期になりそうなのです」

「え？どれくらいですか？」

「それが……。仕事が終わる明確な時期が把握できないのです」

「え。じゃあ1年かかるなんてこともあるんじゃないか？」

「ええ・・・そこで提案があるのです」

「はい。」

「あなた、私の自宅に引っ越してきませんか？部屋は余っていますし個々の部屋バス・トイレがついてますから寮みたいな感覚でいてくれれば」

「へ？？」アレンさんの申し出に私は驚きのあまり声もでない。

「家賃はいりませんよ。こちらの都合であなたに出張をお願いするのですから」

家賃がタダで、この洋館に住めるのか・・・うーん。心惹かれてしまう。でも近所のうわさとかにならないだろうか。家政婦さんだって「あら。まあ」と言っちゃって、まさに「家。婦は見た」状態になったりして。

「ご近所のうわさになったりしたら、困りませんか？私は別に実家も遠いし差し障りありませんけど」

アレンさんは笑って、「大丈夫ですよ。家政婦さんは私の事情を知ってる方ですからね。どうでしょう？申し出を受けてもらえないでしょうか。」

1年以上も家を空ける可能性があるってことは、防犯上も心配だし・・・よし。ここは思い切って憧れの洋館ライフを満喫しよう。私の愛読書のひとつは「赤毛のアン」シリーズだ。

「・・・わかりました。アレンさん。ただ、今の部屋に置いてある家具や家電は持ってきてもいいですか？」

「家具は備え付けてありますから、そちらを使っていたらいいと思いますよ。納戸から好きな家具を出してきてもいいですよ。」

「なんですと。あのアンティークな家具を使ってもいいかな？？すごい。」

「わかりました。じゃあ、家具は処分して家電だけ持ち込みます」

「じゃあ、配線などを手配しておきましょう」

「お気遣いありがとうございます」

アレんさんの提案で、憧れの洋館ライフを送ることになってしまった。

「それで、出張というのは・・・」私は仕事内容を聞くことにした。
「ああ。それはですね・・・」とアレんさんが言いかけたところ、
『俺のアシスタントだ。ナナオ』と、自分に分らない言葉で会話をされて不満たらたらのデルレイが会話に割り込んできた。

2・上司からの引越し命令（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

アレんさんの家は、一応「グリーン・ゲイブルズ」がかなり広くなつた感じです。

描写の欠片もないのは、ひとえに作者に描写力がないからです・・・

3 ・カイガイ違い（前書き）

行き先判明。の巻

3・カイガイ違い

『俺のアシスタントだ。ナナオ』デルレイの言葉に私は耳を疑った。思わずアレンさんを見ると苦笑してうなずいている。

「えー、こんな失礼なヤツのアシスタントなんて出来ませんよう！他に誰かいらないんですか？」

思わずアレンさんに言うと、アレンさんも「すみません、ナナオ。あなたが一番の適任者なんですよ・・・」と電卓を取り出しなにやら数字を打った。

「あれの迷惑料も込みで、今後の給料はこれくらいにしますから・・・どうですか？」

と見せてきた数字は、今の給料の3割増し！！おまけに家賃もタダだし・・・ううう。増えていく預金残高には勝てない。将来を考えたら、こういうヤツのアシスタントをして何かを得るってこともある。

アレンさんのところで働いた当初、本当に2割増しの給料なのかと、実は疑っていて給料日になったらまさきに通帳を確認した。すると、言ったとおり2割増の給料が振込まれており、現在も金額に変わりはない。

「わかりました・・・アレンさんを信用して、デルレイのアシスタントを引き受けます」

「ありがとう、ナナオ。甥は扱いづらい性格ですが、悪いヤツではありませんので、ナナオならきつとこの仕事で何かを得ることができそうですよ」

「はい」

『叔父上、話は終わっただんじょうか？』といらいらした様子でデルレイがアレンさんに聞いてきた。

『終わったよ。ナナオは引き受けてくれるそうだ。デルレイ、よかったな』

『アレンさん、それで私、パスポートを更新しないといけないんですけど』

『パスポート?』

『はい。海外に行くならパスポートが必要ですから』

このとき、アレンさんとデルレイが顔を見合わせて黙ってしまった。

『叔父上・・・ナナオに出張場所を説明してないんですか?』

『しまった。日本でカイガイといえは海の外。違う国のことだった・・・ナナオ』

私は二人の会話から、ちょっと嫌な予感を覚えた・・・ましか、そんなことがあるんだろうか。ファンタジー小説じゃあるまいし。

『ナナオ・・・出張場所と言うのは、海外ではなく、違う世界。異世界にあるブレドン王国なんです』

『はあ?』

『実は、クロスビー商会の仕事は貿易の他にクロスビー家が所有している、こちらとあちらをつなぐ“扉”の管理とクロスビー家がこちらで持っている財産管理があるのです。』

『はあ・・・』

『こちらの財産管理は、ナナオが書庫と倉庫でしっかりやってくれたので何の心配もなくなりました。ですが、王国のほうの書庫と倉庫の管理が・・・デルレイ始め歴代の当主がさぼったせいで正しいことになっていまして。そちらをナナオに整理してきてほしいのです。やはり、異世界というのは、ダメでしょうか?でしたら、こちらの管理を引き続きやっていただいてもかまいませんよ?』

『断つても、クビにはならないってことですか』

『有能なナナオをクビになんてしません。ナナオを王国に持つていかれるのも本当はイヤなんですよ』

異世界かあ・・・32年生きてきてこんなことに遭遇するなんて思いもよらなかったよ。さっき、3割増しの給料で了承しちゃったしなあ・・・後だし情報が強烈だけでも。

それに、異世界を見に行くチャンスなんてそうそうないし。実は、結構わくわくする。

『アレンさん。分かりました。私、王国に行きます・・・ただし、条件があります』

『なんででしょう？』

『私の携帯電話をアレンさんと常時つなげておいてほしいこと、私が頼んだものを届けて欲しいこと、勤務待遇を今と同じにしてもらうこと・・・それから、私が戻りたいと思ったときにはすぐ“扉”を開けてほしいのです』

『条件が多いな、ナナオ』デルレイが口を挟む。

『そちらの都合で異世界に行くんだから、これくらいは当然よ。』

アレンさんは、しばらく考えた後『わかりました。メールは無理ですが、通話はなんとかなるでしょう。充電の心配もいらないように設定もします。』

こちらに戻りたいときは、ナナオ。私に電話をくれればいつでも扉を開けますよ。勤務待遇を同じにするのは当然ですね。その代わり、ナナオは1日1回、私に電話で業務報告をしてくださいね。』

『わかりました。出発はいつですか？それまでにこちらに引越してきます』

『1週間後に迎えに来る』デルレイが口を挟んだ。

『わかりました。アレンさん、今日の仕事が終わったら引越し準備に入ります。』

この年齢でファンタジー経験をするなんて。人生って驚きの連続だよ。

3・カイガイ違い（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

主人公は給料3割増し（デルレイの迷惑料込み）で異世界に行くことを自分で決断しています。

ちよっとトリップとは違うような気がして、タグに「トリップ」を入れておりません。

4 ・おいでませクロスビー家（前書き）

七生、異世界に到着。の巻

「ここから」が日本語、「」がブリードン語となります。

4・おいでませクロスビー家

あれから引越しを済ませ、私はブレドン王国に来ている。

アレンさんをお願いして、私の給料の半分をこちらのお金に換金して送ってもらうことにした。もらった給料で現地の服と靴を買えばいいか、と考えた私はとりあえず最低限の服と小物だけで“扉”をくぐった。

デルレイが現当主のクロスビー家は・・・でかい。屋敷だ、屋敷。

使用人として勤めているのは、家政婦のヴェラさんと執事のクロードさん。ちなみにこの二人は夫婦だ。それに料理人のトマスさん。トマスさんはヴェラさんとクロードさんの息子さんだそうだ。

他にメイドとしてエルシー、ティア、ミリアムの3人。

デルレイが私を連れて戻ってきたときに、ヴェラさんと呼んで「ナナオ・サクラギだ。こちらの倉庫と書庫を整理してくれることになった」と紹介してくれた。

その後も似たような感じでデルレイから屋敷の人たちに紹介された私は、最後に自分の部屋に案内された。

「ここが、ナナオの部屋だ」

引越す前に住んでいた2DKのアパートがすっぽり入ってしまったほどの広さに英国風のこげ茶色のアンティーク家具が配置されていて、大きな窓にうすい緑色のカーテン。

「きれいなお部屋を用意してくれてありがとうございます。クロスビー」

「気に入ったのならよかった。明日、書庫と倉庫に案内するから仕事に取り掛かってくれ。」

「わかりました」

デルレイが出て行き足音が遠ざかるのを確認すると、私は「広ー

いつ！！すごーいつ！！これ、ヨーロッパのアンティーク家具よね？？アレンさんの家と一緒に！！しかも猫足バスタブ！！トイレが別なものいいわ。洗濯機と乾燥機までついてる。やーん。嬉しすぎ！！』とはしゃいでしまった。ベッドも当然アンティークでしかもダブルサイズ。ふつかふかの布団に思わずダイブ。落ち着け、32歳。

窓の側に行くと、広大な庭が見える。アレンさんの庭と違って手入れが行き届いているみたいだ。「・・・観葉植物とか持つてくればよかったかな。きれいな庭だなあ、散歩したいなあ。」

「散歩は自由にしていただいて大丈夫ですよ？庭師に頼めば植物の鉢ももらえます。」

「ああ、そうなんですか。ありがとうございます・・・??？」
突然、第三者の声がした。

振り向くと、ヴェラさんがメイドさんを連れて立っていた。確かに名前はエルシーさん。

「申し訳ありません。ノックをしたのですが、ご返事がなかったもので体調でも崩されているのかと思ひまして」

あああ。キヤーキヤー言つてたから聞こえなかったんだろうなあ・・・恥ずかしすぎる。

「す、すみません。気づかなかつたです」もー誰か穴を掘つて私を埋めてくれ。

「いいえ。お部屋を気に入っていただけたようで何よりです。ナナオ様、このたびは当家の倉庫と書庫の整理に来ていただいてありがとうございます。後ほど、執事のクロードも挨拶に伺うといつてました。」

「あの一、ヴェラさん。ナナオ様じゃなくて“ナナオ”でいいです。私、倉庫と書庫の整理係でアレンさんの部下ですからあなたたちと立場は同じですし、“様”なんて普段もよばれてないです。」

「そうですか・・・それでは“ナナオさん”と呼ばせていただきますま

すね」ヴェラさんはなぜか残念そうだ。逆に後ろにいたエルシーさんは、私に親しみを持ったみたい。

「ナナオさん。こちらのエルシーがナナオさんのお世話をすることになりました。エルシー、ご挨拶なさい」

エルシーさんは、前に進み出て「エルシーと申します。これからナナオさんのお世話をすることになりました。よろしくお願いいたします」

せ、世話係……どうして書庫と倉庫の整理係に世話係がつくんだ……。

4・おいでませクロスビー家（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

ヒロインの扱いが厚遇されているのは、私のご都合主義、主人公至上主義の話が好きだからです。

5 世話係がつけました（前書き）

七生、世話係を世話されて困る。の巻

5・世話係ができました

「ヴェラさん。あのー、世話係って、どんなことを頼めば???自分のことは自分でできますけど」

「ナナオさんは自立された女性なんですね。さすがアレン様ご推薦の方だけあります。ですが、彼女に身の回りのお世話を頼んでいただけないでしょうか。エルシーの入れるお茶は美味しいですよ。」

「はあ……」そうは言われても。

「それでは、ナナオさん。エルシーを置いていきますから、本人と話してみてくださいね」

「はい。お気遣いありがとうございます」

ヴェラさんは、そういうと部屋を出て行った。

うーん……とりあえず、お茶を頼んでみようかな。

「えーっと、エルシーさん。お茶をいただけますか?」

「はい。かしこまりました。あ、ナナオさん。お茶のセットは部屋に常備したほうがよろしいですか?」

「え。常備していいの?」

「はい。お茶菓子も頼めば厨房でいただけますよ」

「……すごいですね」うーん、もしかデレレイってお貴族様ってやつか。そういうアレンさんは、品があるもんね。デレレイは品に欠けるけど、あの傲慢さはお貴族様に違いない。

「じゃあ、お茶のセットをお持ちしますので、少しお待ちください」そういつて、エルシーさんは部屋を出て行った。

こちらのお茶は紅茶と似ている。でも一口飲んでみると紅茶の渋みがなくて爽やかでフルーティーな香りがして美味しい。ナッツのクッキーもハーブの香りがしてお茶に合う。

「お茶もクッキーも美味しい!!!作り方を教えて欲しいなあ。」

「トマスさんに伝えておきますね。きつと喜んで教えてくれますよ」
エルシーさんが2杯目を注いでくれる。

「そうだ。エルシーさん」

「はい」

「私の世話係ってことなんだけど、どんなことを頼めばいいのかな。私、たいていのことは自分でやれるから、世話係いらない・・・」
と言いかけたところ、エルシーさんが泣きそうになったしまった。

「エルシーさん??ど、どうしたの?私、変なこと言ったかな?」

「ナナオさん。私、一生懸命やりますから、どうかそのようなことと言わないでください。役立たずだと思われるしまつてクビになつてしまいます。」

ええ。そんな重要事になっちゃうの??

とりあえず、遠慮するエルシーさんを座らせて、別のカップに入れたお茶を勧め、椅子に座らせる。

「クビなんて、そんな大事になるわけないわよ。たかが整理係が世話係を断つたくらいで」

「そういうわけに参りません。ご主人様からの命令なのです」

ご主人様っていうと、デルレイか。あの傲慢オトコなら平気で首切りそうだよな。

「そっか。わかった。じゃあ、改めてよろしくね。なるべく迷惑かけないようにするけど、忙しいときは部屋の掃除やシーツの交換、それにゴミだしとかお願いしちゃうかもしれないけどさ」

「はい。それくらいお安い御用です。」

「よかった。ありがとう。あ、でもお茶は毎日入れてもらいたいな。ヴェラさんの言うとおり、エルシーさんの入れたお茶は美味しいね」

エルシーさんは、それこそ花が咲いたように「ありがとうございます」
と、とびきりの笑顔で笑ってくれた。

5・世話係がつかまりました（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

出ましたよ。異世界物の定番（？）ヒロインにつくメイドさん！！

6 仕事開始！（前書き）

七生、デルレイのことを少し知る。の巻

6・仕事開始！

王国への出張が決まったときに、アレンさんから「こちらの時間表記と違うから、この目覚ましを持っていくといいです」と似てるんだけど、ちよつと違う置時計をもらった。王国の人も目覚まし時計を使うんだなあ、と変なところで親近感をもった。

基本、仕事の開始時間はアレンさんのところと同じく朝9の時。違うのは終了時間で、クロスビー商会では不定期だったんだけど、こちらでは夕食が夜7の時と決まっているので、夜6の時までが仕事時間となる。早く終わることが出来る場合は終わってかまわない、とアレンさんとデルレイから言われている。

そういえば、初めて屋敷に来ていらい、デルレイを見ていない。ヴェラさんによると、普段は王宮の中にある部屋で生活しているらしく休みの日しかこちらには来ないらしい。そういえば、私はデルレイのこと、アレンさんの甥っ子ということしか知らないなあ。ヴェラさんに「クロスビーさんは、王宮にお勤めなんですか？」と聞いてみた。

「はい。デルレイ様は王宮で魔道士長のランス・アイルズバロウ様の右腕として働いていらっしゃるんです。」とヴェラさんは誇らしげに言う。

ふーん、魔道士ってエリートなのかも。今度アレンさんに聞いてみよ。

「ナナオさん、デルレイ様に魔道士のことを聞いてみたらいかがですか？きつと喜んで説明してくださいますよ」

「そうですねー。機会があったら聞いてみます」私はその気もないのに調子のいい返事をした。

エルシーさんはベッドに朝食をお持ちしましょうか、と言ってく

れたんだけど、さすがにそれは断って着替えが終わる頃に朝食を運んでもらう。

パンとお茶にフルーツの朝食を食べ終わった頃、デルレイが部屋に入ってきた。

「おはよう、ナナオ」

「おはよう、クロスビー」

「そろそろ、書庫と倉庫に案内してもいいだろうか」

「ちらりと時計を見ると、朝9の時15分前。準備も終えてるから、まあいいか。」

「はい。大丈夫です」

「わかった。それでは行こうか」私はエルシーさんに見送られて部屋を出た。

書庫と倉庫は、私がこちらの世界にやってきた“扉”の隣にあった。デルレイはドアの前にたつと、何やら呪文をとнаえて扉の前に手をかざした。すると、ドアが青く光ってカギの外れる音がした。その光をデルレイが手に取り、ちよつと握るとなぜか青い石が入った銀色の鍵が現れた。

「これが、このカギだ。この階は歴代の当主とアレン叔父しか入れない結果が張ってあるから整理係のナナオが入れないというのは、困るだろう？」

今は俺と一緒にだから結果があつても大丈夫だけど、これを持つてると一人で結果の中に入れる。常時持てるようにペンダントにした。失くすなよ。」

「今の青い光はなに？」

「光が見えたのか？」驚くデルレイ。

「え。何、見えちゃいけないの？」

「いや、そんなことはない」デルレイが焦って言ったのが気にかかるけど、仕事が先だ。

私は、ペンダントを首にかけた。鍵がキラツと青光りしたのは気

のせいかな。

ドアを開けると、長年開けていない部屋の匂いがする。でも、不思議とほこりっぽくない。

「虫除けやカビ防止の魔法だけは欠かさなかったからな。ただ、いろんな年代の物と書物がまじっていてな」たしかに、部屋はともかく物の乱雑さはさすがすぎる。こりや空いてるスペースに適当に物や書物を入れてったな。

「アレんさんが、歴代の当主がさぼったせいっておっしゃってましたね。クロスビーは王宮の仕事が忙しいから、手が回らなかったんでしょう？」

「どうして、俺が王宮勤めだって知っている」

「ヴェラさんに聞いた。普段は王宮で生活していて休みの日にしか戻ってこないと、ヴェラさんが寂しそうだつたよ。休みの日以外にも戻ってくればいいのに」

「・・・これからはそうしよう。それでは仕事を始めてくれ。何か面白そうな資料があったら俺に教えてくれないか？俺に事前に見せることが前提になるが、物によってはナナオが部屋に持ち帰ってもいいぞ。それと、これ」と私に宝石のガーネットに似た色の石をくれた。

「なんですか？これ」

「伝達石だ。結界が張つてあるから家の人間はここに近寄れないのだな。ヴェラと世話係のエルシーにも持たせてあるから、用事があればこの石に呼びかけるように」

「へえ」電話みたいなものだな。ほほう。

「色々気を遣ってくれてありがとう。クロスビー。」

「・・・たいしたことはない。では、俺はそろそろ出かけるから」
そういうと、デルレイは部屋を出て行った。

6・仕事開始！（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

タイトルどおり、七生が整理係ならデルレイは「魔道士」です。
ようやく少し、七生がデルレイに関心を持った・・・かな。

7・昼食を一緒に（前書き）

実りあるお昼？の巻

7・昼食を一緒に

私は一人、書庫兼倉庫の部屋をぐるりと歩いてみることにした。代々のクロスビー家の当主は、整理はさばったものの書類や書籍は書庫へ、物は倉庫へと分類はしていたようだ。

書庫部分と倉庫部分の中間に窓があつて、その前の光がよく入る場所に机と椅子が置いてある。机のうえに、伝達石と時計を置いてバインダーに紙を何枚か挟み、とりあえずアレンさんの家でやったように整理していこう。エルシーさんからもらったアイボリー色のエプロンに手袋とペンを入れ、分類表を手に持ち作業開始。

見た感じ歴史関係の本が多そうなので、「歴史」からスタートだな。

それにしてもくブレドン王国の歴史>というタイトルだけで詳細版と概要、教科書に子供用まである。お世話になってる国だから、私もここから何冊か借りて読んでみようかな。

歴代の当主たちのことが書かれているくクロスビー家の歴史>、1枚の大きな紙に書かれたくクロスビー家家系図>デルレイの名前がないから、最近のではなさそうだ。

とりあえず、使っていない大きな机を発見したので、そこに「歴史」関係の本をどんどん置いていく。本をある程度分類できたら次は目録を作らなくちゃ。私が戻った後にも使いやすくしておかないとね。

ふと時計を見るとお昼。伝達石が光り、「ナナオさん。ご主人様が昼食を一緒にしたいとのことですので部屋まで戻りましたら食堂までご案内します」とエルシーさんの声がした。

うーん、デルレイと食事か。どうせ断れないんだろうな……。

案内されたのは、二人の距離がやたら離れている白いテーブルク

ロスのかかった長いテーブルのある部屋じゃなくて、普通のダイニングルームのような部屋だ。

「今日は仕事じゃなかったんですか」

「お昼を食べるのに戻ってきたんだ。進捗状況も聞きたいから、よほど忙しくない限り昼食も夕食も家で摂ることにした」

「あー、そうですか」

「・・・不服そうだな。」

「とんでもない。ちょうど、聞きたいことがあったのでよかったです」

「何か面白いものでもあったか」

「歴代の当主の皆様は歴史書がお好きだったみたいです。歴史書がたくさんありました。あ、家系図もありましたよ。作ったのはアダルバード・クロスビーさんという方でした」

「アダルバード・・・というと、おれの曾祖父だな。100年以上前になるな。」

「そんな前のものだったのですか。とても状態がキレイですよ。持つてきましようか？」

「あとで俺が見に行くよ。他には？」

「王国の歴史書から1冊お借りしてもいいですか？お世話になっている国ですから、歴史は知っておいたほうがいいと思うので」

「最新のもののほうがよくないか？俺が持つてるのを貸してやる」

「・・・そーですか。ありがとうございます」

「・・・他に聞きたいことはないのか？」

デルレイは私に何を聞いてほしいんだろうか。魔道士の仕事内容とかかな？

側に控えてるヴェラさんを見ると、「仕事について聞いてやってくれ」と目が言っている。

「そーですねえ・・・。あ、クロスビーの職業って魔道士だっけ。どんな仕事をするの？私のいた世界では魔道士という職業がないから、イマイチよく分からないのよね」

デルレイはわが意を得たりという顔をした。

「そうか。しかし、それはちょっと時間がかかるな。よし、今日の夕飯のときに話してやる。俺もそろそろ戻らないと遅刻してしまうからな」

・・・・・・なし崩しに夕飯と一緒に摂る約束をしてしまったよ。

7・昼食を一緒に（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

デルレイは意外と世話焼きな人です。
七生はプレッシャーに弱いです。

8 ・魔道士は熱く語る（前書き）

魔道士ってこんなですよ。の巻

8・魔道士は熱く語る

お昼を食べた後も、私は書庫でひたすら歴史書だけを探し出し机に置いた。

半分ほどを机のうえに置いたところで夜6の時になった。

デルレイと夕食だっけ……。

着替える必要はないとのことなので、仕事で着たカットソーにスカート。それに今まで履いていた3センチのパンプスという格好で夕食に行くことにした。

「明後日の休みに、服と靴買おうかなあ。最低限しか持ってきてないからなあ……エルシーさん、いい店知ってたら教えてほしいんだけど」

そういうと、エルシーさんは「ようやく世話係の定番が来ました……私、頑張りますっ。明後日、オススメの店にご案内いたしますー!」とすごく嬉しそう。

えーっと、教えてくれれば自分で行くだけだなあ……という私の困惑をよそにエルシーさんは「外出許可をいただかなくてはっ」とか“ついでにアクセサリーのオススメ店もご案内しますっ”とか異様に張り切っていた……。

夕食も昼食と同じ部屋で、今度はなぜか二人きりだよ、おい……。

料理は、たっぷりのパンと前菜と主食で成り立っている。毎日こんなに食べてたら絶対太るな。庭を散歩しよ。それにしても、パンも美味しいけどそのうちお米が恋しくなりそうだ。

アレンさんに頼めば送ってくれるかなあ……。

「食事は、美味しいか？」

ぼんやりと考え込んでいたのを食事が美味しくないのかとデルレイに思われていたようだ。

「へ？食事は美味しいですよ」

「・・・何か考え事してただろ。」

「へ。いえいえ別にたいしたことではありません」

「ふーん。ならいいが・・・そういえば明後日は休みだろう。何か予定はあるのか」

「エルシーさんに案内してもらって服と靴を購入します。最低限しか持ってきてないので」

「・・・そうか。」

「あ、そうだ」

「なんだ」

「仕事の合間に庭を散歩してもいいですか。」

「かまわん。」

「許可をありがとうございます。」

そのまま私とデルレイは、ひたすら黙々と食事をし、最後の飲み物になった。

ああ・・・さっさと部屋に戻ってのんびりしたい。

「ナナオ。昼に魔道士について知りたいと言ってたな」

「あーはい。言いました」アレンさんに聞こうと思ってたんだけど、ヴェラさんの目力に負けましたよ。ええ。

「まず、ブレドン王国は魔力を持つ者と持たない者がいる。差別はないが、魔力がないと就けない職業というものがある。治療師、魔法騎士、魔道士がそれに当たる。治療師はそのまま治療魔法が特に優れているものになる。魔法騎士は攻撃魔法と守備魔法が優れているものになる。魔道士は、先にいった両方の魔力を持ちなおかつ幅広い知識が必要になる。」

「幅広い知識？」

「そう。この国には人のためになる魔法と人に害をなす魔法がある。害となる魔法を取得できるのは魔道士だけだ。ほかに天文学や薬学、医学、王宮に勤めるからには政治学も知らないと言われてしま

うからな。俺はあんまり出世に興味ないけど、出世したい魔道士は政治学を学ぶのに熱心だな。」

「クロスビーは出世や名誉に興味ないの？」

「俺はクロスビー家当主って言うだけで、それなりに地位があるからね。これ以上忙しくなりたくない」

「なるほど。ヴェラさんから魔道士長のランス・アイルズバロウさんの右腕だと聞いたけど」

「あの人は、王国で怒らせてはいけない人第一位なんだ。仕事ぶりもすごいが、人柄も食えない。アイルズバロウ家は代々治療士の家系なのだが、この人はなぜか魔道士になった。そのうち顔を合わせることになると思う。アレン叔父の友達だし」

「へえ」デルレイが逆らえない人、その2つてやつか。その1は間違いなくアレンさん。

何にせよ、魔道士というのは大変なエリート職業だというのは分かった。名家に生まれたうえに能力に優れたエリートじゃ、ハンサムだけとちよつと残念な性格になってもおかしくないな、と私はなんだか納得したのである。

8・魔道士は熱く語る（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

魔道士についてはウィキペディアの「魔法使い」の項を参考にしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1043ba/>

魔道士と整理係

2012年1月11日10時48分発行